

「ロジャッ」の可能性——第5回国際マレーシア学会議に参加して——

井口由布

第5回国際マレーシア学会議 (Fifth International Malaysian Studies Conference; MSC5) が、2006年8月8日から10日までマレーシア・プトラ大学 (Universiti Putra Malaysia; UPM) において開催された。最新のマレーシア研究についての成果を発表する場である同会議は、1997年にマラヤ大学において第1回会議が開催されて以来、2年おきに開かれている¹。主催は、マレーシア社会科学学会 (PSSM Persatuan Sains Sosial Malaysia) であり、共催者として名前を連ねているのは、ホスト機関である UPM の人間生態学部 (Faculty of Human Ecology)、マレーシア・ウタラ大学 (Universiti Utara Malaysia) の行政・法学部 (Faculty of Public Administration and Law) である。また、UPM と国際交流基金クアラルンプール支部が支援をした。

第5回国際マレーシア学会議の公式テーマは「マレーシアにおける「開発以後」——開発アジェンダにかんする反省と将来—— ('After Development' in Malaysia: Reflections on the Development Agenda and the Future)」である。このテーマの主眼は、開発途上国の優等生であるマレーシアにおける開発のつぎの課題を模索しようというものではない。むしろ、マレーシアでは貧困がまだ継続しており、公正で平等な社会は実現していないという現状認識のうえで、今こそが、開発主義的なリーダーシップとこれを支えてきた開発学を再検討すべきであると述べている。もちろんこの再検討は、「ネオリベラリズム的な市場原理主義と小さな政府への信奉」によって開発学を端へ追いやってしまうことを意味しているのではなく、西洋先進諸国に「追いつく」ことに全精力を傾け、物質的な開発にこだわるあまり人間開発 (human development) をなし崩しにしてきたことを反省的にとらえようということである。

基調講演は、上記の公式テーマにほぼそうかたちで3回行われた。1日目はマレーシア社会科学学会前会長であり現国際連合経済担当事務総長補佐 (Assistant Secretary-General for Economic Affairs, United Nations) であるジョモ・K・S (Jomo K. S) による「マレーシアはできるのか? ——よりよい経済発展のための分析的基盤—— (Malaysia Bolehkah?: The Analytical Basis for Better Economic Development)、2日目はマレーシア国民大学のマレー世界・文明研究所 (Institute of the Malay World and Civilization; ATMA) と西洋学研究所 (Institute of Occidental Studies; IKON) 所長であるシャムスル・A・B (Shamsul A. B.) による「マレーシアにおける社会科学の新局面を開く——いくつかの構想と行動計画—— (Reshaping Social Sciences in Malaysia: Some Ideas and Action Plans)」、3日目はアジア戦略リーダーシップ研究所 (Asian Strategy

¹ 第4回国際マレーシア学会議は当初2003年に予定されていたが、SARSの影響により2004年8月に延期された。

and Leadership Institute; ASLI) の政策科学センター (Policy Research Centre) 所長リム・テックギー(Lim Teck Gee)による「開発——終わらないアジェンダ—— (Development: The Unfinished Agenda)」であった。

プログラムによれば、3日間に58のパネルがあり、合計193の報告がなされた。報告の内容は多岐にわたり、社会科学の諸分野だけでなく、言語や文学、環境問題、科学技術などにかんするトピックがプログラム上に並んだ。これらの口頭報告を網羅的かつ包括的にとりあげて、マレーシアにおける社会科学の最新の傾向をつかむということは、私の能力をはるかに超えている。ここでは、わたしが参加したかぎられたパネルから、マレーシアにおけるアイデンティティ研究の一局面を描きだしたい。

アイデンティティの問題はマレーシアにおける社会科学的研究における重要なトピックである。これまで、マレーシアはエスニックな問題のために国民的なアイデンティティが確立していないとみなされ、そのことが西洋先進諸国をモデルとする近代化の障害であると暗黙のうちに考えられてきた。そこで、アイデンティティというトピックにおいてもエスニシティと国民統合にかんする問題領域が注目に着目されてきた。MSC5においても同様で、たとえば UKM のマレー世界・文明研究所 (ATMA) は「エスニック・アイデンティティとネーション (Ethnic Identity and the Nation)」というタイトルで二つのパネル (パネル 19 と 44) を開催した。また、パネル 16 「マレーシアにおけるエスニック間関係 (Inter-Ethnic Relations in Malaysia)」とパネル 48 「エスニック関係、アイデンティティ、ネーションフード (Ethnic Relations, Identity, and Nationhood)」もエスニック・アイデンティティと国民統合の課題にとりくんだ。

マレーシアにおけるアイデンティティ研究は、1990年代あたりから、カルチュラル・スタディーズやポストコロニアル批評の影響のもとで変容していく。すなわちアイデンティティが本質的なものではなく、諸力の交渉過程においてつくられるものであると考えられるようになったのである。たとえば、シャムスル・A・Bが議長をしたパネル 5 「マレーシアを超えるマレーシア学 (Malaysian Studies Beyond Malaysia)」、ATMA 主催の二つのパネル 「ポストコロニアルなマレーシアのポピュラーカルチャー (Postcolonial Malaysian Popular Culture)」 (パネル 26 とパネル 33)、パネル 45 「知の生産とイギリス植民地主義 (Knowledge Production and British Colonialism)」、パネル 53 「知、文化、国民形成 (Knowledge, Culture and Nation-Building)」では、学問的な知から大衆文化にいたるまでの言説の編成と、アイデンティティ構築の関係を問題にした報告が並んだ。

カルチュラル・スタディーズやポストコロニアル批評の影響をうけたアイデンティティ研究では、エスニシティだけでなくジェンダーやセクシュアリティも問いなおされている。たとえば、パネル 54 「女たち、そして近代化する国民国家 (Women and the Modernizing Nation-State)」はジェンダーという視点から国民国家を問いなおすところみであり、「わたしたちがこの町をつくる」——クアラルンプールと開発主義—— (1) ("We Build This City": Kuala Lumpur and Developmentalism (I)) (パネル 24) は、都市空間をクィア

(queer) から解読しようとするものである²。

最後に、この会議では論争含みの「プルーラル」にかわって、アイデンティティ研究の将来のキーワードとなる可能性のある「ロジャック (rojak)」という新しいことばが登場したことについて触れておこう³。この用語がたびたび登場したのは、上で触れた ATMA 主催の二つのパネル「ポストコロニアルなマレーシアのポピュラーカルチャー」においてである。アジアにおけるカルチュラル・スタディーズの推進者であるシンガポール大学のチュア・ベンファット (Chua Beng Huat) や UKM のザワウィ・イブラヒム (Zawawi Ibrahim) が参加し、音楽、映画、伝統芸能、大衆小説などが分析された。「ロジャック」という言葉をもっとも積極的に使用したのはマレーシア科学大のタン・スイベン (Tan Sooi Beng) である。かのじよは、「私たちは「ロジャック」を愛している (We love Our "Rojak")」というタイトルで、複数の言語がミックスした「バハッサ・ロジャック bahasa rojak」によって歌われる「ロジャック・ソング」と呼ばれるポピュラー音楽を分析した。タンは、現代マレーシアにおけるアイデンティティのありようを「ロジャック」によって肯定的にとらえようとしている。また、ザワウィ・イブラヒムによる「ポピュラーカルチャーと「従属的ナショナリズム」——ポストコロニアルマレーシアにおけるニューシネマと「アイデンティティ」にかんする論争の再生産 (Popular Culture and "Secondary Nationalism": The New Cinema and the Reproduction of Contestation on "Identity" in Postcolonial Malaysia)」やベンジャミン・マッケイ (Benjamin Mckay) による「ニューシネマの諸実践における美学を総合する (Synthesizing the Aesthetics of New Cinema Practices)」における、アズハル・ルディン、アミール・ムハンマド、ヤスミン・アフマド、タン・チュイムイ、ホー・ユーハン、ジェームズ・リーらによる新しいスタイルの映画についての討議でも、タンのいう「バハッサ・ロジャック」のような言語実践とそのような諸実践がうつつだすマレーシアにおけるアイデンティティのありようがたびたび言及された。

そもそも「ロジャック」とはマレーシアの大衆的な食べ物の名前で、乱切りにしたさまざまなフルーツや野菜を唐辛子の入った甘辛いソースで和えたものである。タンたちは「ロジャック」を概念としてくわしく説明したわけではないが、これからの研究に有用となる示唆に富んだことばではないかと考えられる。以下において、上記のパネルの討議から浮か

² 「queer」は英語ではもともと「奇妙な」という意味であり、「同性愛者」を指す差別的な俗語であるが、1990年代頃から、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスセクシュアル、トランスジェンダー、クロスドレッサーらが、みずからを表す言葉として肯定的に使用しはじめた。「queer」という言葉にこめられているのは、ヘテロセクシュアルが「正常」であるというのが、歴史性をもった考えであり、あくまでも権力の側による恣意であるということである。ゆえに「queer」とは、そのときどきに権力や規範によって性的な逸脱としてみなされたものであり、固定的で実体的な指示対象をもたない。

³ 第3回国際マレーシア学会議において ATMA が主催した円卓会議では、「プルーラル」や「プルーラリズム」概念をめぐる行き違いや誤解が生じた。くわしくは井口由布「プルーラリズムをめぐる多元的状况——第3回国際マレーシア学会議から考える——」『JAMS News』No. 21 (2001年9月)を参照のこと。

びあがる「ロジャツ」について考察してみたい。

「ロジャツ」は、器のなかですべての要素がとけあう「るつぼ」ではない。すなわち「ブルーラル」な要素がすべてとけあって国民統合がなされている状態ではないのである。乱切りされたそれぞれのフルーツや野菜は「エスニック・グループ」の比喩表現のようではあるが、それぞれのフルーツや野菜はそれだけでは意味をなさない。それゆえ「ロジャツ」は、それぞれの「エスニック・グループ」が統一体とみなされる多文化主義とは趣を異にしているとみてよいだろう。「ロジャツ」は国民国家という一つの皿に入れられ、共通の国民的理念とでもいうべきソースでむすびつけられていると解釈することができる。しかしながら、タンたちが着目しているのは皿やソースなどに表現される国民的な結びつきよりもむしろ、「ロジャツ」がもつ大衆性や雑種性のようである。つまり「ロジャツ」は政府が積極的に保護したくなるような国民的伝統食ではなく、どこまでいっても大衆的な食べ物だ。このような雑種性や非正統性は、カリブ海地域の文学者たちが提唱した「クレオール」概念にも共通するところがある。

以上のように「ロジャツ」はいまだ概念としては錬成されていないが、マレーシアにおけるアイデンティティのありようを直観的につかみとった表現であると考えられる。マレーシアにおけるアイデンティティ研究は、これまで他の地域において醸成された枠組みや概念を流用していくことが多かったが、「ロジャツ」が比喩表現を超えて概念として精錬されるならば、それこそシャムスのいうように「マレーシア社会科学の新局面を開く」ことになるのではないだろうか。

第5回国際マレーシア学会議における JAMS 会員による報告

左右田直規

すでに井口由布会員から第5回国際マレーシア学会議(MSC5)の総括をしていただいたので、ここでは、同会議における JAMS 会員による報告をご紹介します。複数のパネルが同じ時間帯に開かれていたこともあり、すべての会員の口頭発表と質疑応答を聞くことができた訳ではない。そこで、各会員の報告の要旨を発表順にまとめることをもって、レビューに代えさせていただきます。

まず、Malaysian Political System & Leadership と題されたパネルにおける山本博之会員による報告“Regional Challenge and Central Adjustment to Federalism in Malaysia”は、サバ州と中央政府との関係に焦点を当てて、マレーシアにおける federalism の展開を論じたものである。同報告によれば、1963年のマレーシア形成の際に、バンサ(bangsa)を基盤にした政党の連合政治(一種の“federalism of bangsa”)を特徴とするマラヤの政治システムは、民族をめぐる状況が異なるサバには、完全なカタチでは導入されなかった。